跡見学園女子大学紀要　第17号（1984年３月15日）

教師の考える「授業の魅力」について

藤　沢　伸　介

SUMMARY

The purpose of this study is to investigate the structure of attractiveness of lessons in school. Responses given by 673 teachers as to how they make their classes attractive were classified into twelve tactics : 1. novelty introduction 2. experientialization 3. goal setting 4. adjustment of clearness 5. contrast exaggeration 6. compulsory involvement 7. reinforcement of accomplishment 8. presentation of evaluation standard 9. recognition of accumulated references 10. demonstration of respect 11. presentation of devotion, sincerity and sympathy 12. self-education. Each of these twelve tactics corresponds to the following elements of attractiveness : 1. attention 2. interest 3. desire 4. comprehension 5. memorization 6. 7. training 8. evaluation 9. accumulation 10. self-esteem 11. reception availability 12. teacher's trustworthiness. This paper also compares the attractiveness of lessons between ordinary schools and juku schools.

授業の魅力という概念は，これ迄，教育心理学の用語としてはあまり使われていない。これは，魅力という概念が一つの価値判断を含めて使われることが多く，いわゆる学問上の概念として必ずしも妥当とはいい離いことと，魅力という概念を操作的に定義することが極めて難しく，従って，魅力的であるかどうかの程度を計量的に把握することができないことが，その理由であると考えられる。

しかしながら，教育が一つの説得（行動変容のための働きかけ）の過程であると考えられるとするならば，その説得の効果を高めるためには，教育の重要な位置を占めている授業が魅力的であれば，それが学習意欲の向上に寄与すると考えてさしつかえなかろう。確かに，学習は生徒の義務であり，生徒が意欲を示さないならば，それは一方的に生徒の側の問題であるという前提に立つ限り，「授業の魅力」という発想は出てこない[1]。しかし，これまでの教育心理学における様々な知見は，賞讃によって好ましい行動を強化したり，学習材料や学習時間の配分に関する最適な方策を提示することによって，生徒の意図的行動だけでは到達し得ないレベル迄の行動変容を可能にして来つつある。「授業の魅力」という概念は，必ずしも規定の容易な概念ではなく，抽象度の高い概念である。しかし，だからといって無視されるべき概念ではないと思われる。

本論文の目的の一つは，「授業の魅力」という概念を心理学の用語として導入することである。そこで，日常語として使用されている魅力という語を特に定義せずに調査を行うことによって，現職の教師が自分の行っている授業に於て，何を魅力と考えているかを，まず調べてある。又，次に，その魅力を持たせるために，授業を行うにあたってどのような方策（tactics）をとっているかを調査し，かつ考察を加えてある。

方　　法

本研究は，教員を対象とした一連の調査の一部として，面接により口頭で解答を得，面接者が書きとるという方法で行われた[2]。質問は，「授業を魅力的にするために工夫していることがありますか。あれば具体的にお答え下さい。」というものである。

解答者は673名で，内訳は，小学生対象の教員　138名，中学生対象の教員　188名，高校生対象の教員　303名，小中高のうち複数校にまたがる者　40名，その他4名であった。又，性別は，男性418名，女性252名で，平均教職歴は13.8年（標準偏差9.16年）であった。

結果と考察

I.「魅力」に対する教師の態度

解答数673名のうち20名は，問に答えずに，「授業の魅力」について私見を述べたり，或は無関係なことを述べているので[3]，無効解答とした結果，有効解答数は653名であった。その内訳は（表1）の通りである。

解答種別	人数	%
A　魅力的にする工夫をしている。		
1.　授業運営上の具体的方策を述べた者	584	89
2.　自己研修に重点をおいて解答した者	10	2
3.　一般的に効果の疑問視されている方策を述べた者	9	1
4.　工夫をしているとだけ解答し内容を述べなかった者	7	1
B　魅力的にしたいがうまくできないと解答した者	4	1
C　魅力的にする必要がない，又は，意志がないと，解答した者	39	6
計	653	100

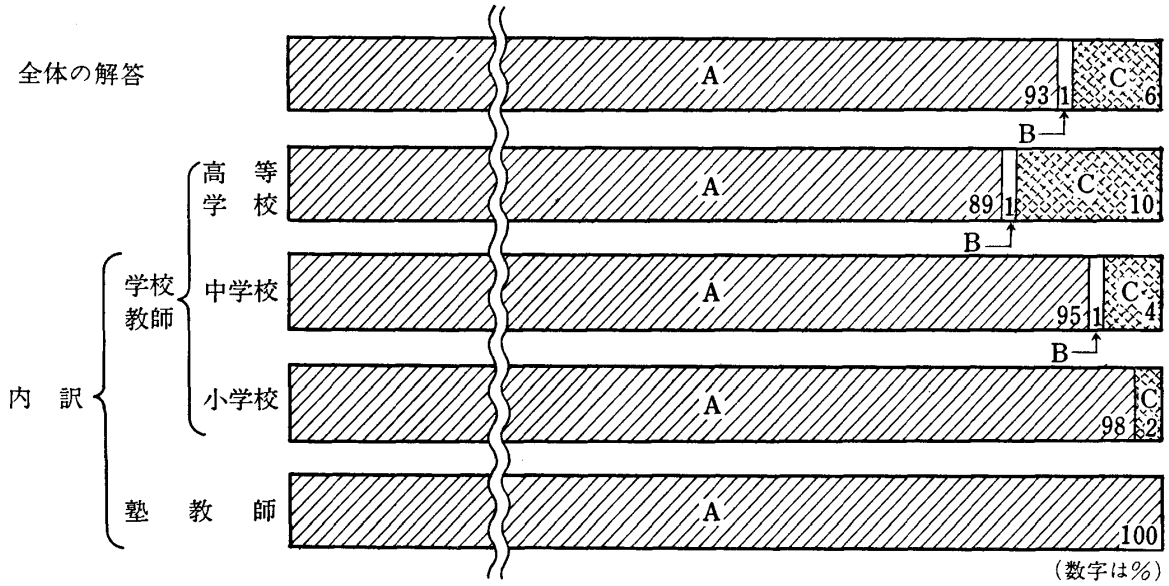
表1　解答内容別の解答者数とその割合

この表の中で，Ａ１の具体的方策については後で詳しく述べるが，教育効果が期待できると考えられる様々な授業運営上の方策の中で，ある特定の授業に対する工夫は，すべてここに含まれる。Ａ２は，授業時間外に教師が行う自己研修について述べたものである。Ａ３は，駄洒落で笑わせる，授業中遊ばせる，教科と無関係な体験談を話す等，授業自体の積極的魅力化というよりは，授業中に，本来の内容と無関係な部分を入れる消極的魅力化の方策を述べたものである[4]。

この結果は，多くの教師は「授業の魅力」を必要と考え，何らかの工夫をしていることを，示している。

Ⅱ．学校別にみた教師の態度

「魅力」に対する教師の態度は，Ⅰで見た通りであるが，小学校・中学校・高等学校で比較してみると，それぞれの中で教師の態度がやや異なってくる。これを示したのが，（図１）である。



Ａ：授業を魅力的にする工夫をしていると解答した者
Ｂ：魅力的にしたいがうまくできないと解答した者
Ｃ：魅力的にする必要がない，する意志がないと解答した者

（図１）　学校別にみた魅力に対する教師の態度

この図を見てわかるように，生徒の学年が低くなればなる程，授業を魅力的にする工夫をしているという傾向がある。又，Ａの内訳に関しては，Ａ２の自己研修型の対応をした教師は，いずれも中学（３％）高校（１％）生対象の教員であり，小学生対象の教員には，この解答はなかった。又，塾教師に関しては，Ａの解答が100％であり，Ｂ，Ｃ共に解答はなかった。

Ⅲ．魅力の必要性について

注意すべきことは，今回の解答者の中に，魅力的にする工夫をしていない教師が，全体の６％いたことである。これらの解答者の中には，積極的に授業の魅力化を否定している者も何名かいた。この反応は，授業を魅力的にすることができないことの合理化として，片付けるべきではないことを（図１）が示している。即ち，魅力的にする工夫をしていない者の率は，小学生対象教員２％，中学生対象教員４％に対して，高校生対象教員10％でというように，上級学校にいく程ふえているからである。特に高校に多いことは，もはや高等学校は義務教育ではないということ

に，関係があるであろう。

本論文では，魅力という概念を検討するのが目的であるから，これら，魅力不要論者の主張を検討する必要がある。６％の解答者の主張は，細部においては個々にその内容が異っていたが，例えば高校教員の場合，大筋に於ては次のようにまとめることができる。

即ち，義務教育課程に於ては，学習に興味を持っていない生徒でも学習が義務づけられているので，生徒が学習しやすいよう教師が配慮をしなければならない。しかしながら，高校は義務教育ではないのであるから，通学は本人の勉学の意志が前提になっており，教師が生徒を授業に魅きつけようと工夫をする必要はない。むしろ，学習者が自分から問題意識を持って学習にとり組めばよいのであって，教師の役割は，魅力的な授業をすることではなく，理解を助けることであるべきである。以上が，これら授業を魅力的にしていない教師の，その根拠であるようである。

しかしながら，この考え方に対しては，次のような反論も成り立つであろう。第一に，高等学校への進学率は，1982年で94.3％になっており，殆どの者が高校に進学することから，現在の高等学校に対する期待は旧来の高校に対するそれと異なってきており，学習意欲の欠如した者が高校の中に多数存在している中で，教師が授業を行っているという現状を考えなければならない。専門家としての教師の真価を，生徒の前で最も発揮できる場が授業であるとするならば，魅力的な授業を行った方が，そうでない場合に比べ，生徒の信頼を得る可能性も高く，青年期にある生徒の生活指導も，よりやり易くなるに違いない。

第二に，学習意欲の高い者のみが入学すべきである，又は，入学してきていると仮定しても，それぞれの生徒の興味は多様であり，すべての生徒がすべての科目に同程度に興味と意欲とを持っている可能性は，殆どないといってよい。幅広い知識を持つことが必要であるという根拠から，科目の選択が指定されており，従って興味のない科目でも履修しなければならないとするならば，生徒は，興味の持てない科目についても，一定の知識を記憶しなければならない。この時，生徒がまだ興味を持っていない科目であれば，記銘も保持も困難になるに違いないし，その科目で修得すべき思考法も，修得されにくいであろう。生徒がその科目に興味を持つようになる確率は，もし授業に魅力があれば，そうでない場合に比べ，高くなることは容易に推論され得る。より興味を持つようになれば，その科目で得た知識は，より忘却の確率が減少することになる。それは，全体としてみた時に，教育効果が高いと考えてさしつかえなかろう。

第三に，生徒が，教師の担当する科目に既に大きな興味と高い学習意欲を持っていたと，仮定しよう。この場合でも，その生徒の興味は，専門家としての教師の興味や洞察とは同一ではないであろう。同一でなければ，教師が授業に対して行った魅力的にするための工夫は，生徒にとって知的な刺激になり，さらに，生徒がその科目の追求する世界により精通するようになったり，思考過程が活性化する可能性も高くなるに違いない。

以上の三点により，授業の魅力化は必ずしも不要とは言えず，さらに生徒の学習意欲や問題意識の如何にかかわらず，授業の魅力化は授業運営の必要条件と考えられるであろう。

Ⅳ．魅力の内容について

魅力を持たせるための具体的な方策，即ち（表１）でＡ１に分類されたものは，非常に多岐にわたったが，大別すると，11の領域に分類することが可能であった。

1．新奇的導入

授業の導入時について，いくつかの方策が提出された。①クイズで始める。②意外な話題から

始めて，いつの間にか本論にはいるようにする。③不思議な現象(特に視覚的驚き)の紹介ではじめ，テーマに結びつける。④授業形式を時々変化させる。これらは，いずれも授業に注意を引くことを目標にしていることがわかる。

2. 体験化（又は，擬似体験化）

この中には，⑤実物を見せたり，⑥現地に生徒を引率したりする方法が含まれるが，これは，現実には，いつでも誰でもどの科目でも実行可能というわけにはいかない。そこで，様々な擬似体験（記号的体験）をとり入れるということになる。⑦スライド，写真，映画などで視覚的に体験させる。⑧テープ，レコードなどを用意し，聴覚的に体験させる。⑨身近な話題から，事例を提供する。⑩歴史的エピソードを伝えることで，過去の場面を再現する。⑪海外の話題を伝えることで，異った場面を再現する。これらの方策は，いずれも擬似体験（又は，言語による記号的体験）をさせることによって臨場感をもたせ，その結果，生徒を学問的発見がなされた時点にまで引き戻したり，或は，一定の学問的事実の修得の必然性のある場面に連れていく効果を出すことになる。これは，知的好奇心を刺激し，結果的に，学習内容に興味を持たせることができる。

3. 目標設定

この分類に属するものは，学習の意義を伝える方策と問題意識を持たせる方策に大別できた。前者に関しては，⑫授業前に単元全体の見通しの説明をする。⑬この学習をすれば何ができるようになるのかを示す，等があり，後者に関しては，⑭予め生徒から感想，疑問を出させ，そこを出発点とする。⑮小テストを行ったり小問を発したりして，生徒に各自の弱点に気付かせる。⑯事前に学習プリントを配布する。⑰問題を提示し仮説を立て，その仮説を検証しながら授業を展開する。といった方策が示された。これらは，いずれも学習意欲を持たせることになる。

4. 明瞭度調整

学習内容が生徒にとって理解しやすいものであれば，生徒は授業に魅力を感ずるかもしれないが，もしあまりにも難解であれば，授業が自分とは無縁の存在のように感じられるであろう。又，内容があまりにも容易であれば，この場合も授業の魅力を減ずる可能性がある。そこで，教師は，解説の際の明瞭度を調整する必要が生ずる[5]。この範疇に属するものは，まず生徒の実態を知り，明瞭度を最適レベルに合わせ，生徒の思考力を活性化しようとする方策である。具体的には，⑱質疑応答により，理解度を確認しながら授業を進める。⑲基礎事項を詳しく解説する。⑳解説をわかりやすくする[6]。㉑発問の工夫により生徒の考えを誘導し，難解な概念に到達させる。㉒声の大きさの調節。㉓板書の工夫（図表化色分けなど）による，体系・重要点・差異などの明示。などが出された。これらに共通した考え方は，学習内容を理解させることが授業の魅力につながるとする，考え方であろう。

5. 対比強調

生徒にとって，授業時間中ずっと集中し続けることは困難である。単調な内容の連続であると，集中力が散漫になり，授業後の印象は曖昧なものとなる。そこで，生徒の精神活動のリズムに合わせて重要点を強調することにより，学習内容がより鮮明に記憶され，それが生徒に修得感を与えることになる。具体的には，㉔緊張と弛緩の時間調整を行う。㉕理解の時間と記録の時間をわける。㉖重要点を繰返し強調する。㉗重要語句をフラッシュカードにして注目させ，板書と併用する。といった，対比によって重要点をより強調する方策が示された。学習内容を記憶に残すのに，これらはいずれも役立っていると考えられる。

6. 強制関与

教師の展開した授業内容に生徒を強引に巻き込むことによって，生徒は，問題を自分の問題として捉え，学習過程を体験することになる。これは，一つには，生徒の自主的考察や訓練が期待できない場合に，授業時間を利用して課題を実行させ，成功感を味わわせることであり，又一つには集団思考のきっかけを作ることである。この方策として示されたものとしては，㉘グループ学習を利用する。時には競争心を利用する。㉙全員に作業をやらせる。㉚全員を指名する。㉛生徒実験を多くする。㉜スピーチ・翻訳など少し難しい課題を最後までやりとげさせる。などがあったが，いずれにせよ，これら生徒活動は，教師による事後処理の如何によって魅力を産み出すか否かが決まることは，言うまでもない。

7.　達成強化

学習には，理解だけでなく訓練の要素が必要である。しかしながら，訓練は，単純作業の繰返しであったり単なる機械的繰作の連続であることが多く，しばしば，理解に比べて単調で退屈なものである。そこで，進歩のあとが本人にわかるような工夫をしたり，努力を称えたりして，何らかの形で訓練という行動を強化する必要がある。㉝練習の成果を褒めたり表彰したりする[7]。㉞級があがることで，進歩のあとが認識できるようにする。㉟練習がゲームになるようにする。といった方策が示されたが，これら達成を強化する方策は，言うまでもなく，練習の頻度を増加させるのが目的である。

8.　評価基準の提示

好ましい学習成果が得られた時に教師がそれを強化するというのが，達成強化の方策であったが，8.の方策は，生徒が自分で自分の達成を見極めて満足（自己強化）し得るように，教師が自己評価の基準を伝えるというものである。例えば，㊱その日に学習した基本事項によって，実は難問が解けるようになっていることを教える。㊲その日に学習した基本事項によって，実は多くのことがわかるということに気付かせる。のように，役立つ内容を修得したことを認識させるという方法が一つある。もう一つの方法は，㊳授業中に，生徒が自分で考えながら結論を導き出す場面を作る。というものである。一般に，法則や定理は，いくつかの下位命題や事実や公理の論理的組み合わせによって，導き出されるものが多い。評価基準提示の方策ではそれをただ解説するのでなく，何故それが導き出されるのかを，他の色々な可能性を集団思考によって検討しながら，教師の巧みな誘導によって，生徒が独力で結論に到達するのである。到達したことによって，初めて生徒は命題その他の論理的結合の必要性を認識し，かつ，自分が独力でその筋道を辿ったことを，評価できるようになる。難問が解けた時の満足感は，これにあたるものであろう。

いずれも，生徒が全体像を大きく把握することによって，部分の価値を認識し，自分で自分の達成した部分を評価可能にするのが，この分類である。

9.　蓄積再認

これは，生徒自身に，価値あるものが蓄積されたことを再認させる方策である。㊴役立つ資料を配布する。㊵ノート指導を行い，自分の記録があとで役立つ資料になるようにする。㊶学習量記録のグラフをつくる。などが例として示された。一般に学習の蓄積は視覚的に認知できない。それで，目に見える形で蓄積される工夫をすることで，満足感を喚起するのがこの方策である。

10.　人格尊重

一個の人間として尊重されているという気分を味わわせることにより，生徒の気持の中にゆとりを生み，さらに尊重の期待に応えたいという気持を起こさせることを目標としているのが，この方策である。そのためには，全員の生徒に授業に貢献する機会を与え，その貢献を教師が楽し

んでいるという雰囲気を作ることになる。具体的には，㊷生徒の重要な質問・発見は大いにとりあげる。㊸授業展開に好ましい質問が生徒から出された時，その生徒に礼を言う。㊹わざとミスをして，生徒に発見させる。㊺すべての生徒を時間内に少なくとも１回は主役になるようにする。㊻個人差が目立たぬように，指名順や作業内容を工夫する。㊼誰でも発言しやすい雰囲気をつくる。㊽努力の成果やするどい考察は，褒めると同時に喜びの表情を見せる。㊾添削・個別指導を充実させ，自分が応援されていることに気付かせる。などが示された。

11.　自己表現

しばしばありがちなことであるが，生徒の教師に対する好き嫌いの感情は，授業の好き嫌いに影響する[8]。年齢が低ければ低い程この関連は大きく，生徒は，嫌いな教師からは学ぼうとしないものである。従って，授業が魅力的である為には，先ず教師が魅力的である必要があるが，この教師の魅力とは必ずしも教師の性格そのものの魅力と同一ではない。教師が人格者だからといって，人気を博すとは限らない。このグループとしてあげられた方策は，教師の自己変革を目指すものでなく，教師が自己を授業の中でどう表現し，生徒に対峙していくかの方策であった。これらを見る限り，むしろ生徒は教師の授業に対する取り組み方を見ているようですらある[9]。

自己表現の方法としては，A．情熱，B．誠実さ，C．共感の３つを示すということに集約された。Aの「情熱」に関しては，㊿授業時間に最も精力的になるよう，生活のリズムを工夫する。(51)自分がその授業内容にのめりこむように授業に臨む。(52)教師の人生観や哲学など，教師が今できる最高の姿や考え方を学期に一度位は生徒にぶつける。(53)授業中の演出を考え，耳に快く響く話し方で，生徒に情熱的に語りかける。などが示された。又，Bの「誠実さ」という項は，(54)充分な授業準備をする。(55)進度を熟知して授業に臨む。(56)笑顔を絶やさない。(57)服装・言葉遣い・生活行動に気をつける。(58)家庭や社会に対する問題，不機嫌さといった私的な感情を授業に持ちこまない。などをあらわしている。又，Cの「共感」については，(59)時々冗談を含めてリラックスさせる。(60)生徒の立場に立った授業内容の感想を述べる。(但し，学習意欲を減退させるような感想は，説得的意見と併置する)。(61)教師の行動が理解できるように，随時解説を加える。などが出された。

日本の社会では，自己は他から自然に認知されるべきものであって，意図的に演出されるべきではないという考え方も存在しており，そういう立場に立つ者にとっては，この方策を容認するのは抵抗があるかもしれない。確かに，大人同志の人間関係に於ては，特に一定の演出をしなくとも，教師がどのような人間であるかはわかるであろう。しかし，子供の対人認知方策が大人のそれと同一であるという保証はない。子供の教師認知については，さらに発展した研究の成果を待つ他はないが，少くとも教師の経験の蓄積によれば，ここにあるように，生徒の求めているものは，情熱・誠意・共感の３点であることが推論される。そしてこれらの要素は，教師の生得的な性格特性ではなく，勤務態度であることは，注目に値する。即ち，特定の性格の持ち主のみが教師として魅力的であり得るのではなく，すべての教師に魅力的になり得る可能性があることを示しているからである。

V．授業を魅力的にする自己研修

今回の調査の解答の中で，A２に分類されたものは，ある特定の授業に対する工夫ではなく，日頃の自己研修について述べたものである。A２の解答は，A１の解答と異なり，授業の魅力化は長期的展望のもとでも考えるべきことを示している。出されたものとしては，(62)研究授業・公

開授業など，他人の授業を多く見て学ぶ。㊸たえず資料を収集する。㊹生徒との雑談を行い，生徒の興味の調査を行う。のように，自己の蓄積増加をめざすものが多かったが，中には，㊺自己の人格を高めるよう努力する。などもあった。

一回毎の授業に関して魅力的であるかどうかを問題にすることができると同時に，全体的な魅力化も考えることができるわけで，この自己研修の目的は，信頼感を高めることで，主として後者をめざしているのである。

VI. 学校の授業と学習塾の授業

IV及びVでまとめた各方策に関して，学校教師が報告したものと，塾教師が報告したものは，常に一致していたわけではない。両者の間には，（表2）に示すような差が見られた。

報告者による分類	方　　策
主として学校の教師の報告した方策	強制関与
どちらかといえば学校教師の報告した方策	対比強調　達成強化
学校の教師も塾の教師も報告した方策	新奇的導入　体験化
どちらかといえば塾の教師の報告した方策	明瞭度調整
主として塾の教師の報告した方策	目標設定　蓄積再認 評価基準の提示 人格尊主　自己表現 自己研修

（表２）　学校と塾における方策の違い

報告された方策を実際に採用されている方策と解釈してよいかどうかは疑問の余地があるが，採用方策よりは報告方策の方が常に少ないであろうし[10]，意図的に実行している方策に対する報告した方策の割合もそれ程個人差が大きいとは思われないので，（表2）に表わされた報告方策と報告者の所属の関係は，採用方策の結果と並行であると考えてさしつかえなかろう。

（表２）の差は，IVで列挙した11の方策が必ずしも同一理念に基づく方策ではないか，又は，学校と塾の教育の本質的な違いによるものかという，両方の可能性を示唆している。

まず，方策間の関係から見ていくことにする。目標設定の方策は，まず生徒の意欲を刺激し自主的に学習することを期待するので，学習という行動に対しては間接的であるのに対し，強制関与はそのまま学習に参加させるわけであるから，強制関与の方がより直接的である。又，生徒の行動性向という面からみると，目標設定の方策は，生徒がより自主的であることが期待され，強制関与の方は生徒がより指示遵守型であることが期待される[11]。自主性と指示遵守性は必ずしも逆の概念ではないが，非常に自主性の強い生徒が強制関与の授業を好まないことは，容易に推測されると同時に，指示遵守性の強い生徒は，しばしば依存傾向が強い。

次に，達成強化の方策について考えた場合，待っていても，必ずしもすべての生徒に対して教師が強化する機会があるわけではないから，強化する前提として，作業をやり遂げさせねばならない。そういう意味で，この方策は強制関与の方策を前提として効果を発するので，両者は密接な関係がある。

これに対し，評価基準提示の方は，目標設定と関連して，全体的視野を与え自分で自分を評価できるようにもっていくので，より生徒の自主性が期待されているという点で，この２つの方策

には密接な関連がある。

次に，学校の教育と塾の教育の違いという点から見ることにする。学校では「強制関与一達成強化」という方策が主としてとられ，塾では「目標設定一評価基準提示」という方策が主としてとられている。これは，学校と塾の本来的な違いから考えて，充分に納得のいく関連であろう。即ち，学校は中途入学や退学が殆ど不可能に近いのに対し，塾は中途入退会は自由である。学習作業は長期的にみて役立つものであっても，必ずしも楽しい作業ばかりとは言えない。しかし，学習内容の修得にはある程度の作業は欠かせないから，塾では，この時生徒を説得した上で本人納得の上で作業をさせることになる。そうしないと退会する生徒が出てきて，教育の継続が困難になるからである。これに対して学校では，本人にとって負担の大きい作業を課したとしても，それを理由に退学することは殆どない上，教師は社会的に認知された学業成績を記録する力を持っているので，学習の意義を伝えたり説得したりせずに，強制的に関与させる方策をとることが可能になるのである。

このことを，先程述べた，生徒に期待する行動性向との関連でみると，学校教育は生徒に指示遵守性を期待し，塾は生徒に自主性を期待するという傾向になってくる[12]。学習塾の授業時間数が学校に比べて圧倒的に少ないということも，訓練は生徒の自主性に待つということの原因になっているのであろう。

又，塾の教育が，より人間関係に重点をおいているということも，(表2) から読みとることができる。これは，一般に学校に比べて学習塾は一クラスあたりの人数が少ないということに起因しているかもしれない。

いずれにせよ（図１）や（表２）は，学習塾が授業の魅力を重視している傾向を，はっきりと示しており，これは，教育の継続を可能にするための対策と解釈できるであろう。

授業の魅力に関する考察

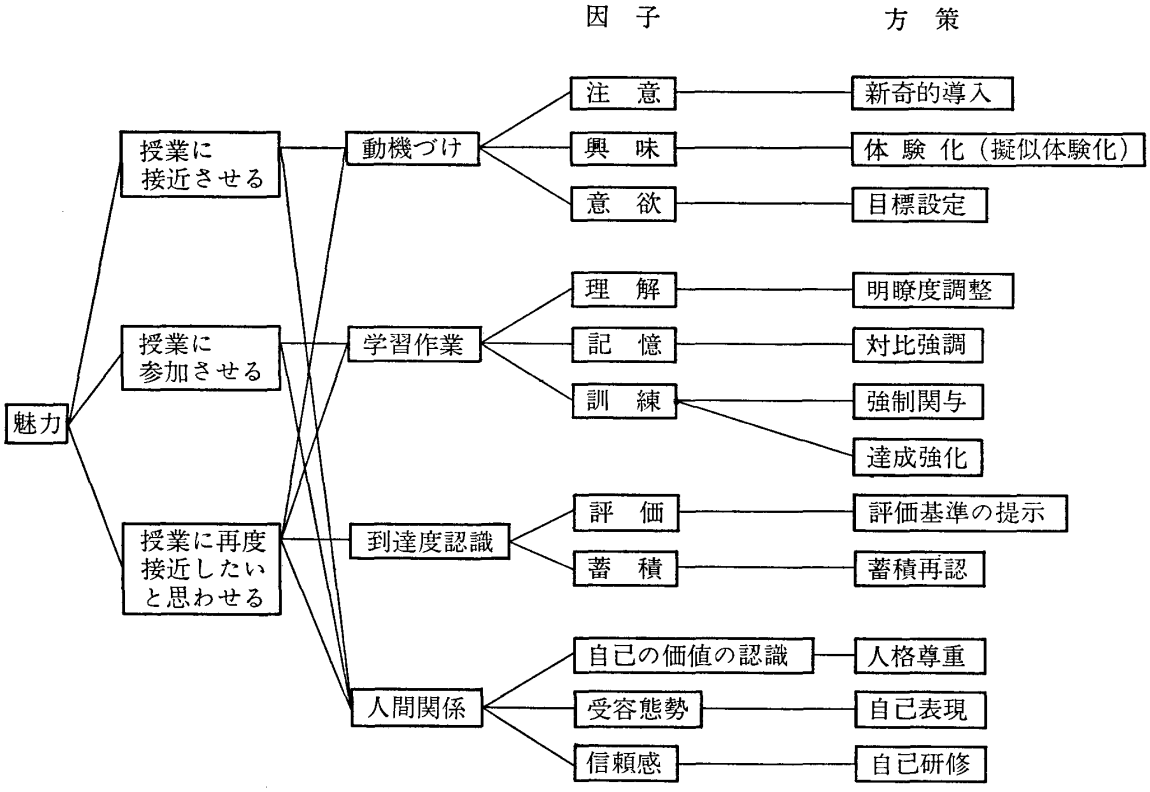
ここ迄で，今回の調査結果を検討してきたわけであるが，この結果に基づいて，次に魅力の構造をまとめることにする。

(表3) は，各方策とその目標を一覧表にしたものである。この表を見るとわかるが，すべての方策によって，学習に対する動機づけ，学習作業，到達度認識，教師と生徒の人間関係が，一通りすべてカバーされている。動機づけは，生徒を自分の意志で授業に接近させる力である。又，学習作業の項は，接近した儘の状態を継続させる力になり，到達度認識の項は，その他の項と合わせて，再度の接近を促す力になると考えられる。人間関係の項は全体に関わってくるであろう。以上のことから，「授業の魅力」は次のように定義してもさしつかえないであろう。即ち，「生徒が，自分の意志で，展開されている課題に接近し，そこで学習活動を継続し，授業後もその授業に再度接近したいと思うように作用する，

目標		方策
動機づけ	注意 興味 意欲	新奇的導入 体験化 目標設定
学習作業	理解 記憶 訓練	明瞭度調整 対比強調 強制関与 達成強化
到達度認識	評価 蓄積	評価基準提示 蓄積再認
人間関係	自己の価値の認識 受容態勢	人格尊重 自己表現

（表３） 方策と目標の一覧表

授業の持っている力。」となる。さらに，魅力の因子は，注意・興味・意欲という「動機づけ因子」，理解・記憶・訓練という「学習行動因子」，評価・蓄積という「到達度認識の因子」自己価値の認識・受容態勢・信頼感という「人間関係因子」から成立しており，それぞれに対応した，教師の側の方策としては，新奇的導入・体験化（擬似体験化）・目標設定・明瞭度調整・対比強調・強制関与・達成強化・評価基準提示・蓄積再認・人格尊重・自己表現・自己研修の12がある。以上をまとめて図解したのが（図２）である。これは，さらに，充分な検討と改良が必要である。



（図２）「授業の魅力」の構造

結　　語

以上本論文では，新しく「授業の魅力」という概念を導入することを提案しつつ，その魅力の構造や，授業を魅力的にするための様々な方策を検討してきた。魅力という概念は抽象度の比較的高い概念であるが，科学の用語としての検証に耐え得るように，できる限り具体的に記述することを試みた。

さらに，これまでの教育心理学における研究報告は，事例報告と原理検証実験報告のいずれかに著しく偏っており，どちらも現場に応用できる問題として，批判や検証には適当でないものが多かった。そういう意味で，今回の研究は，批判・検討・応用のいずれにも耐え得るようなレベルでの記述を試みた。現在，日本の教育界は様々な問題点をかかえているが，授業が教師と生徒との重要な接点である以上，「魅力化」に対する考慮が今以上になされてもよいのではないか。又，本文中で明らかなように，学習塾の授業は，魅力的であるための配慮が学校以上になされている。これは，学校教育に対する一つの警鐘ともいえるかもしれない。

（注）

1）産業心理学の方では，広告・宣伝を一つの説得の過程として位置づけ，いかに魅力的な販売方策をとる

かということが検討されている。これは，消費者が自由選択のもとに商品を購入するという前提があるためであろう。教育の世界に於ては，生徒は消費者としては位置づけられておらず，しかも通常は生徒には教師に対する選択権がないために，魅力ということが正面から取り上げられなかったのは，当然といえるかもしれない。

2) 本研究は筆者一人の手によるものでなく，多くの人々の協力によってなされたものであることを，ここに強調しておきたい。面接は，1983年度，跡見学園女子大学の教職課程の科目である「教育心理学」を受講している学生230名が，分担して行った。又，多忙の中快く調査に御協力下さった先生方には，深く感謝の意を表する次第である。

3) 本調査では，解答者が無関係なことを述べて，こちらの求める解答をしなかった場合でも，改めて問い直さずに，返答をそのまま記録している。これは，(1)解答に影響を与えないためと，(2)面接調査の場合，記述式調査と異なり，解答拒否がしにくいことを考え，解答者が返答を意図的にそらす余地を残したためである。

4) 従って対比効果により，授業部分の魅力が減ずる可能性がある。又，ここでは価値判断をさけるため，消極的という語を用いたが，筆者の個人的な判断では，迎合的という語の方がより適切のように思われる。他には，叱らない，機器を利用するなどがあった。機器が授業運営上教師の活動を助けるのは事実であるが，ただ機器を導入するだけでは，珍しい間のみ注意を引くが，見慣れれば注意は引かなくなる。機器を導入することではなく，機器をどう活用するかというところまで考えて述べた解答はＡ１の分類に入れてある。

5) ここでは，難易度という語を用いずに，明瞭度という語を用いている。これは，難易度と明瞭度は多くの場合一致するが，難解な概念であっても直観的に明瞭な場合や，本質が平易であっても生徒にとって明瞭でない場合があるからである。又さらに，難解な部分を解説することによって，平易な部分がより明瞭になる場合がある。明瞭度は，難易度に比べより包括的かつ受け手本位の概念である。

6) 何がわかり易いかについては議論を要するが，ここでわかり易くする為の具体的な方法としては，用語の定義を理解させる，解説を具体的・合理的にする，視覚的な補助（図解など）を付け加える，といったことが出された。

7) 褒めるのは，単なる言葉だけでなく教師の表情，動作，ノートに於けるシール，スタンプ，特別のマーク，作品の展示，賞状，賞品など，様々な強化子が工夫されている。

8) このことは，一般に広く観察され指摘されているが，科学的な検証としては，次の文献が有名である。
Corey, S.M. & Beery, G.S. (1938) Effect of teacher popularity upon attitude toward school subjects. Journal of Educational Psychology, 29, 665-670.

9) これは，従来からの研究に於いて，「成功した」教師と「成功しなかった」教師のパーソナリティ特徴を比較しても一貫した結果を得られていないこととも，一致している。

10) この調査は選択肢選択式ではないので，実際に採用している方策を報告し忘れることはあっても，逆に採用していない方策を報告することは，不可能に近い。

11) 指示遵守性は，obedient の日本語訳である。従順さには，反抗的でないという意味があるが，生徒は，しばしば，学習に専念できず指示に従わないことがあるが，これと反抗とは全く別である。

12) これは，多少の傾向を見ることができるということであって，二者択一的な言明ではないことに注意されたい。又，「自主的に学習できる子供は学習塾に通う必要はないが，自主的に学習できない子供は，学習塾に通学う必要があり，教師に対して指示遵守型であれば，成果があがる」とはよく言われることであるが，今回の結果から見る限り，この社会通念は甚だ疑問の余地がある。